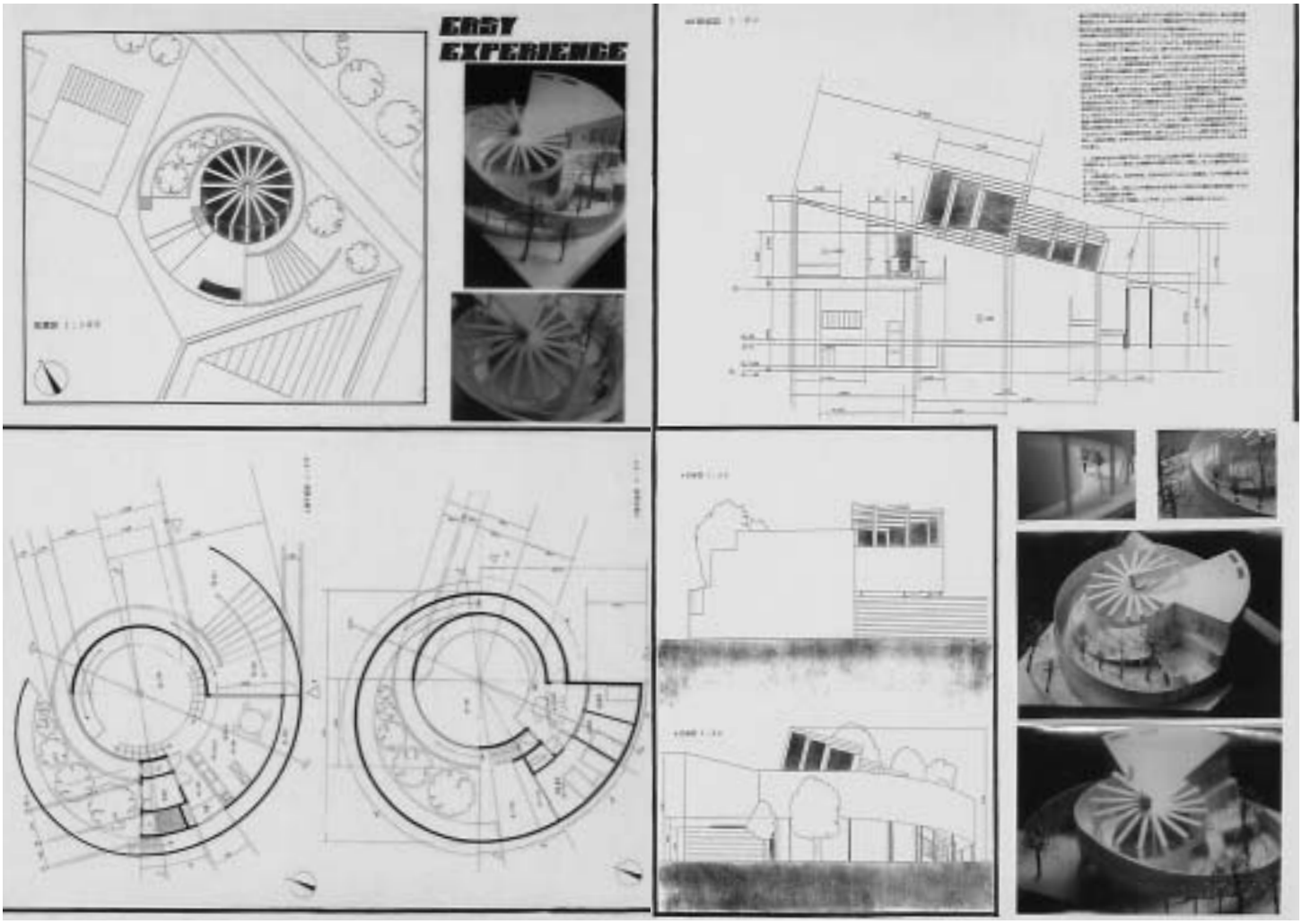
加藤　健太郎



建築設計製図Ⅰ

第１課題
住宅

２年２組

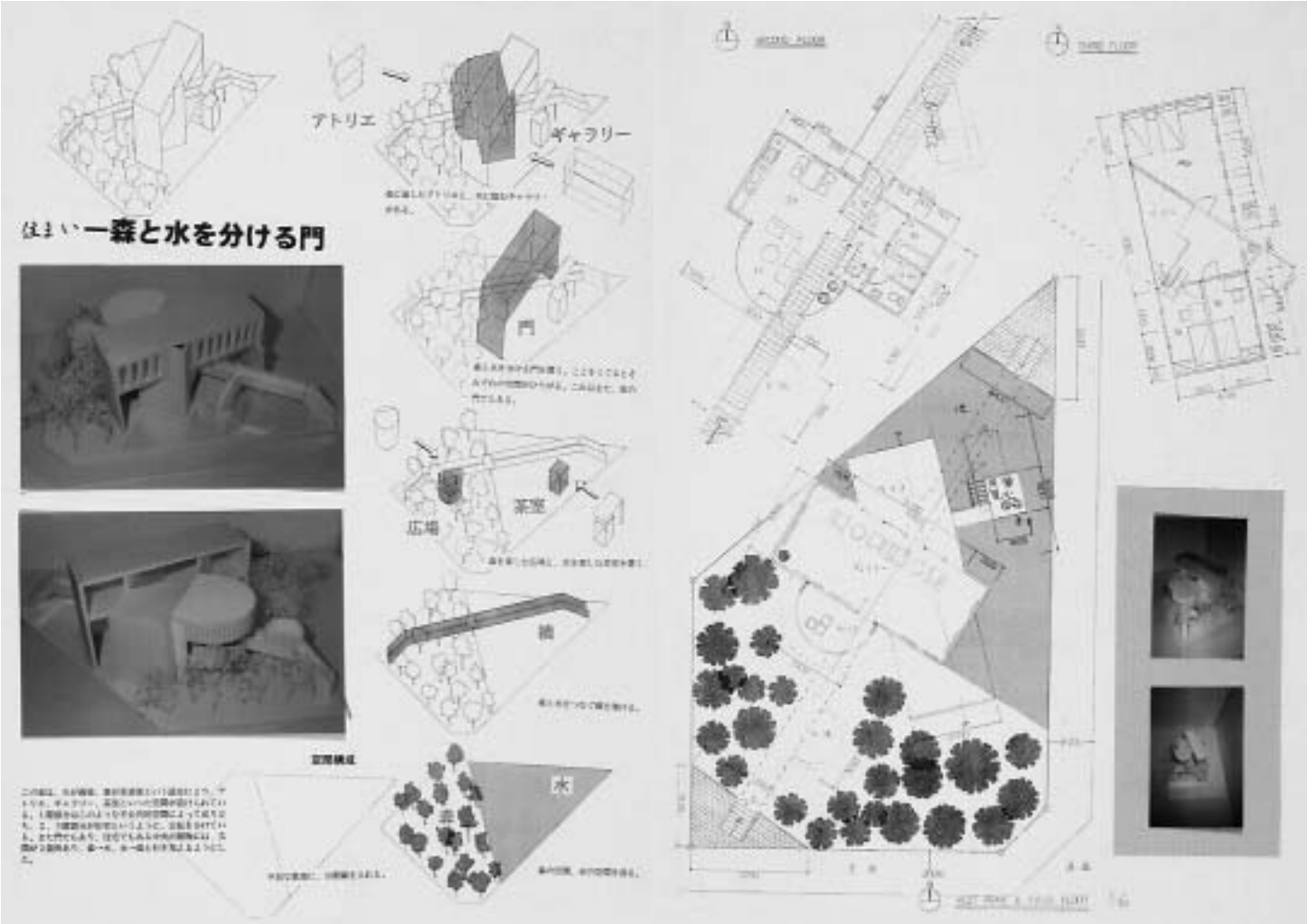
担当＝
宇杉　和夫
石田　道孝
本杉　省三
川口　とし子
高　俊民
白江　龍三
山崎　敬三

加藤　健太郎
「EASY EXPERIENCE」「音楽や絵画のように、その芸術の持つ世界に人間を引き込むような」建築というのが、今回のテーマの一つでもあった。音楽や絵画のような趣味的な部分は少ないが、より壮大で、より根本的な全体というものを持っているのが、建築なのではないだろうか。

指導＝山崎　敬三

住宅のもつ基本要素、すなわち、棲まうという根源的な行為、ヒューマンスケール、人体動作寸法、行動様式、家族形態、そしてその家族の背景としての社会性などの諸要素と、建築空間との応答関係の発見が、これからの設計に際して重要な訓練となるのでしょう。
初めて設計行為をする学生にとっては、見近でアプローチしやすい反面、住むとは一体どういうことなのかと、そもそもの出発点に回帰することに思いをはせるならば、これほど厄介な課題はないでしょう。すでに社会的規範となっているあるべき住宅像に正面から取り組む学生から、住宅がもつ機能を越えた思

村松　直美



想性に着目する学生まで、その幅の広さは魅力的です。そして、当然ながら、基礎的な地道な積み上げ作業による、まっとうな解答は言うまでもなく好感を持てます。

一方、加藤君は、住むことは、すなわち人間が人間たる所以である思索すること、と捉え、自分の心象風景を表現することを提案しています。「思索、トリップ」＝歩く、感じる、を手がかりとして、機能は特にない中心から派生する錯綜した４本の螺旋ルートは、内外空間を貫いています。それは、見え隠れする空間を形成して、人間の視点移動とともに変化し、全てのルートを体験したくなるような魅力をもっています。それは、建築空間を通して自己との対話の触発装置として、印象深いものになっています。また、その形態も、思索の館として喚起されうる主張性を獲得したのではないでしょうか。

だが、課題としては、場所のコンテクストや住宅の機能プログラムと、多重螺旋空間との検討作業が不足していた結果、住宅としてのあるうべき姿の一例としての提案までは昇華出来なかったことでしょう。しかし、加藤君がまさしく、設計という思索の「トリップ」の過程を、苦悩しながらも鮮やかに表現し、「建築」と「人間」の機能以上の関係を考えてくれたことを評価したいと思います。

村松　直美

この家は、夫が画家、妻が茶道家という設定により、アトリエ、ギャラリー、茶室といった空間が設けられている。１階部分には、このような半公共的空間によって成り立ち、２、３階部分が住宅というように、公私を分けている。また門でもあり、住宅でもある中央の建物には、玄関が２箇所あり、住宅へのアクセスである通路（橋）をとおして、森→水、水→森と行き交えるようにした。

指導＝宇杉　和夫

講評会で「この作品には住宅空間としてだけではなく、都市デザインの空間手法を取り入れた格調があります。」と高先生からのお褒めの言葉を戴いた。村松さんの最初の案は公と私の２つの空間に橋をかけ、そこに茶室を作る案から始まった。それが敷地を奥の森の領域と道路側の水の領域に分け、その門として家をつくり、ブリッジで家と門を通過させて森の領域と水の領域を結ぶ案になるには、何回ものエスキースと模型のスタディを重ねての結果であった。最初の目的はブリッジの双方に森と水の２つの茶席（休憩所）を設けることによって達している。空間の構成手法を操作して練り上げた、彼女のオーソドックスな努力の成果でもある。時には船橋校舎の食堂が製図室となった。一階には水辺を挟んで家主である芸術家のアトリエと小展示空間が道路からみえる。今年度の３学部学生交流フォーラムにも出品した。講評会には私の班からは他に湯浅恵美さんの中央のコモンスペースを諸空間がぐるっと巻いて、その屋上にすり鉢状のカーブを描く浮いたパーゴラをもつユニークな形態や、渡辺綾子さんの閉じた一階の空間の間と上に、森の木を模した柱の乱立とその上に浮かぶ半透明の雲が重なるイメージの空間が発表されたが、共に印象深い空間であった。